



Data

監督・編集：バレリア・サルミエント

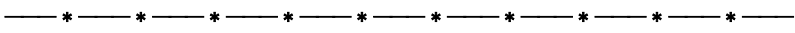
企画準備：ラウル・ルイス

出演：ジョン・マルコヴィッチ／メルヴィル・ブポー／マチュール・アマリック／ヌヌ・ロプス／マルセエッロ・ウルゲール／ジェイマ・ウェスト／ソライア・シャーフス／ヴァンサン・ベレーズ／カルロト・コッタ／マリサ・パレデス／ヴィクトリア・ゲーラ

👁️👁️ みどころ

タイトルと写真を見れば、主人公はナポレオンとウェリントン公爵。誰でもそう連想するが、本作の主人公はナポレオンのスペイン戦役における、ポルトガル軍の軍曹と中尉の2人。そして、名もなき多くの市井の人々だ。

あなたは「ブサコの戦い」や「トレス線」を知ってる？ きっと知らないだろうから、そこからしっかり勉強して、バレリア・サルミエント監督の真の意図をしっかりと確認したい。また、ド派手な戦闘シーンを期待せず、過酷な戦争の中で生きる人間をしっかりと見つめる視点を持たなければ・・・。



■□■主人公は、タイトルからの連想とは大違い！■□■

ベートーベンが交響曲第3番『英雄』を1804年に作曲したのは、フランス革命後の激動期中、国民的英雄として登場してきたナポレオン・ボナパルトに共感し、それを賛美するためだった。ところが、同年5月28日に帝政の開始を宣言し、12月2日に戴冠式を行ってフランス皇帝ナポレオン1世を名乗ると、ベートーベンは、「彼もまた俗人にすぎなかった」と激怒したエピソードはあまりにも有名だが、さてその真否は？

本作は、チリからフランスに亡命してきたという経歴を持つ著名な映画監督ラウル・ルイスが企画準備の段階で亡くなったため、バレリア・サルミエントが後を引き継いで監督・編集して完成させた壮大なドラマ。そのタイトルにいう「皇帝」は当然ナポレオン1世だが、対する「公爵」とは一体ダレ？

トルストイの大河小説『戦争と平和』やチャイコフスキーの序曲『1812年』で描かれているように、ナポレオンは1812年のロシア遠征の敗北によって大きな痛手を受けたが、多くの人々はナポレオンが敗北したのはロシアの冬将軍だけと思っている。しかし、



『皇帝と公爵』

◦ ALFAMA FILMS / FRANCE 3 CINEMA 2012

12月28日(土)、シネスイッチ銀座他全国順次ロードショー

配給: アルシネテラン

実はそれ以前に、日の出の勢いだったフランスのナポレオンを大いに苦しめたのが、海ではイギリスのネルソン提督、陸では同じくイギリスのウェリントン公爵だった。しかして、本作のタイトルになっている「公爵」とは、そのウェリントン公爵のこと。すると本作はハリウッド版『戦争と平和』(56年)やロシア版の『戦争と平和』(67年)が描いたような壮大な戦争大作?タイトルだけを見ると誰でもそう連想してしまうが、実は本作の主人公はナポレオン皇帝でもなければウェリントン公爵でもない。すると、本作の主人公は一体ダレ?

■□「ブサコの戦い」とは?「トレス線」とは?■□

ナポレオンやナポレオン時代を描いた映画は数多い。したがって、ダヴィッド作による『アルプス越えのナポレオン』の肖像画や、トルストイの小説『戦争と平和』に登場する1805年12月2日の「アウステルリッツの戦い」や、1812年9月7日の「ボロジノの戦い」は、多くの人が知っているはず。さらに、いったん失脚したナポレオンがエルバ島を脱出し、パリへ戻って復位を果たした(ナポレオンの百日天下)にもかかわらず、イギリス・プロイセンの連合軍に完敗した、1815年6月18日の「ワーテルローの戦い」も、多くの人が知っているはずだ。

しかし、ナポレオンの「スペイン戦役」や「ポルトガルの戦い」を知っている人は少ないのでは?したがって、本作冒頭に描かれるウェリントン将軍率いるイギリス・ポルトガル連合軍がフランス軍を撃退した1810年9月27日の「ブサコの戦い」や、そこで勝利したにもかかわらず撤退を開始したウェリントン将軍が1年半もかけて築いたという「トレス線」と呼ばれる一大防衛線のことを知っている人も少ないだろう。ナポレオンは

「ロシア戦役」でも攻めに攻めながら、ロシアの撤退戦術と冬将軍に敗れたが、「スペイン戦役」でもウェリントンが仕掛けた撤退戦術と「トレス線」という防御線のために敗れたわけだ。

本作が描くのは、1810年9月27日の「ブサコの戦い」から、翌1811年3月にフランス軍が「トレス線」の防御線を突破できずに撤退を開始するところまでだが、あなたはきっと「ブサコの戦い」も「トレス線」も知らないはず。したがって、本作を本当に理解するためには、そこらのお勉強をしっかりと！

■本作の主人公は、軍曹と中尉の2人■

今から約200年前のそんな壮大な歴史ドラマに登場する本作の主人公は、前述のようにナポレオンやウェリントン公爵ではなく、①ポルトガル軍のフランシスコ・シャヴィエル軍曹（ヌヌ・ロブス）と②同じくポルトガル軍のペドロ・ド・アレンカル中尉（カルロト・コッタ）の2人だ。ハリウッド版『戦争と平和』（第1部66年、完結篇67



『皇帝と公敵』

© ALFAMA FILMS / FRANCE 3 CINEMA 2012
12月28日（土）、シネスイッチ銀座他全国順次ロードショー 配給：アルシネテラン

年）でも、壮大な歴史絵巻の中で展開されるナターシャ、アンドレイ、ピエールの3人を軸とする人間ドラマの他、「アウステルリッツの戦い」と「ポロジノの戦い」の戦闘シーンが見ものだった。しかし本作は、冒頭に描かれる「ブサコの戦い」でも、製作費をケチったためではないだろうが、壮大な戦闘シーンは全く登場せず、戦場に登場するのは死体やそこから物品を略奪する市民の姿ばかりだ。

「ブサコの戦い」でフランシスコ軍曹は何とか無事に生き残ったが、頭に銃弾を受けてタンカで運ばれているアレンカル中尉は、かなりヤバそう。また、フランシスコ軍曹のすぐ隣にいたパーシー伍長は敵弾を受けて即死。パーシー伍長の死をその新妻モーリーン（ジェマイマ・ウェスト）に伝えなければならぬ軍曹はいかにもつらそうだが、さてそこからどんな人間（恋愛）ドラマが…？また、足を失ったため病院の中から動けなくなった上官は、村に侵入してきたフランス軍のためにあえない最期を遂げたが、頭にホウタイを巻いたままかろうじてアレンカル中尉は病院からの脱出に成功。アレンカル中尉は「ここは私の家だ」と主張し、気丈にも一人で村に留まっている女主人フィリパ・サンチェス（マリサ・パレデス）による親身な看病を受けて再び「トレス線」での本隊との合流を目指したが、さてその行方は？2時間32分にわたる本作の人間ドラマはこの2人を軸として展開されるので、それに注目！

■□■その他、多くの主人公たちは?■□■

ナポレオンの登場によって戦争は国家挙げての「総力戦」の様相を呈してきたから、それまでのように一つの戦闘での勝ち負けだけではその帰趨を決することができなくなった。そのことは、軍人ではない一般の人々も否応なく国家間戦争に巻き込まれることを意味するが、バレリア・サルミエント監督はそんなメッセージを込めて、本作に多くの市井の人々を主人公として登場させた。それはすなわち、①フランス軍の略奪から逃れるべく、村を捨てて「トレス線」への撤退を目指す宣教師のヴィンセンテ・ド・アルメイダ（フィリップ・ヴァルガシュ）やその周りをほっつきまわる孤児の少年（ジュアン・アライシュ）、②アレンカル中尉が「トレス線」を目指す途中で出会う、フランス軍の脱走兵と名乗るボルダロ（アドリアヌ・ルーシュ）、③神父でありながら平気でフランス兵を殺し信者たちと共に「トレス線」を目指すアバジュ神父等だ。また、イギリス人の令嬢クラリッサ（ヴィクトリア・ゲーラ）は病身の父と幼い弟を抱えながらポルトガル軍と共に「トレス線」まで撤退していたが、女手一つではそれは何かと大変。そんな彼女には裕福な結婚相手を探すことがベストの選択だったため、彼女は親切にしてくれたイギリス軍少佐のジョナサン（マルセウロ・ウルゲーヘ）に対してモーションをかけたが、さてその展開は？



『皇帝と公認』12月28日（土）、シネスイッチ銀座他全国順次ロードショー 配給：アルシネテラン ●ALFAMA FILMS / FRANCE 3 CINEMA 2012

他方、一人村に残った気丈な女主人フィリパとは逆に、フランス軍のマッセナ元帥（メルヴィル・ブポー）たちを歓迎したのがスイス商会の面々。それはレオポルド（ミシェル・ピコリ）、セヴリーナ（カトリーヌ・ドヌーブ）、コジマ（イザベル・ユペール）たちだが、自分の娘をフランス軍の銃弾によって失ったセヴリーナだけはやはり素直にフランス軍を迎え入れられないようだ。また、ヴィンセンテ宣教師はちょっとしたはずみで見失ってしまった愛妻マリアを必死で捜したものの、その発見は困難。ところが、ある日偶然そのマ

リアが目の前にいたから大喜びだが、彼女のすぐ近くには何と新しい夫が。ヴィンセンテは死亡してしまったと考えてしまったマリアの選んだ選択は決して責められるものではないが、ここでも何とも悩ましい人間模様の展開が。

このような市井の主人公たちを見ればわかるように、本作は「戦争大作」ではなく、まさに「ブサコの戦い」から「トレス線」への撤退の中で展開されるさまざまな市井の主人公たちによる人間ドラマを、バレリア・サルミエント監督の視点から丹念に紡ぎ出したものなのだ。

■□■旧約聖書のこの引用を、あなたは理解できる？■□■

「ナポレオンには決して勝つことのできない男がいた——」。それこそが、イギリスのウェリントン公爵だ。したがって、本作のタイトルを見れば、誰でもウェリントン公爵はさぞカッコいい英雄として描かれていると思うはずだが、実は逆。戦略・戦術の立て方はたしかに天才ナポレオンを上回っていたのかもしれないが、ウェリントン公爵はもっぱら持久戦・撤退戦を得意とした人物だから、多分性格はネクラ・・・？そんな想像どおり、ハッキリ言って本作にみるウェリントン公爵は、自分の肖像画を描かせるについて「死体と血を少なくして、英雄を描け」と勝手な注文をつけたり、おいしいお茶をすすりながら前線を望遠鏡でのぞくという、イヤな奴だ。

それに対して、ストーリー展開の中で明らかになるのは、フランシスコ軍曹はナポレオン戦争の巻き添えを喰って自分の妻や子が井戸に身を投げたため、その弔い合戦として農民から軍人を志願したことが明らかになるから、立派なもの。また、頭の怪我を心配する未亡人フィリパの懸命の「引き止め」をものともせず、「この怪我こそがまさに戦場へ戻る理由である」と告げて、再び部下と合流するべく、トレス線を目指すアレンカル中尉は、まさに軍人の鑑だ。

また、トレス線はウェリントン公爵が1年半もかけて築いたそうだが、もちろんその作



『皇帝と公爵』12月28日(土)、シネスイッチ銀座他全国順次ロードショー 配給：アルシネテラン ●ALFAMA FILMS / FRANCE 3 CINEMA 2012

業に従事したのは現地の農民たち。トレス線は80 kmにもものぼる防衛線だから、その防衛線や砦作りのための労役は重労働。権力や軍事力をかさに着てそんな重労働に現地の人々を駆り出せば、不満が渦巻き怨嗟の声此起彼伏のは当然だが、さて本作にみるトレス線近郊の農民たちは？さらに、本作中盤ではフランス軍から逃れるためにやむをえずポルトガル軍と一緒にトレス線を目指して懸命の「行進」を続ける宣教師ヴィンセンテや令嬢クラリッサなど市井の人々の姿が描かれるが、それは当然ながら痛ましいものだ。そこでフランシスコ軍曹が語るのは、「ナポレオンはゴリアテで、ポルトガルはダビデ、英国はダビデがゴリアテに投げた石だ」という、旧約聖書を巧みに引用した言葉だが、さてその意味は？

■□■トレス線での対峙は？その結末は？■□■

オードリー・ヘプバーンがナターシャ役として出演した、ハリウッド版『戦争と平和』ではモスクワに到着したナポレオンが、ロシアからの降伏の使者がなかなか来ないことにイライラし、部屋の中を歩き回るシーンが印象的だった。「ロシア戦役」で、ロシア軍を指揮したのは、ウェリントン公爵に良く似た持久戦と撤退戦が得意なロシア軍総司令官ミハイル・イラリオーノヴィチ・クトゥーゾフだった。したがって、ナポレオンがモスクワまで到着できたのは、ある意味「引き込み作戦」によるもので、クトゥーゾフ司令官が首を長くして待っていたのは「冬将軍」の到来だった。

それと同じように、「スペイン戦役」でもナポレオン軍はポルトガルの奥深く進攻し、一つ一つのまちを占領していったが、住民も一緒に逃げ出してしまったから、多少の略奪はできても大量の食料の補充や十分な休息をとることができなかった。そのため、何とかトレス線まで進攻し、トレス線をはさんでイギリス・ポルトガル連合軍と対峙したが、そこがギリギリの限界になってしまった。ナポレオンはモスクワでは苦渋の選択として「撤退」の決断を下したが、冬将軍と後を追いかけてくるロシア軍の討伐隊のため、フランスに戻ることができたナポレオン軍の将兵は何と2%未満に激減していたが、さてトレス線のナポレオン軍は？華々しい戦闘シーンが全くない本作で、私は最後にはそんなシーンが見られるのではないかと少し期待したが、バレリア・サルミエント監督が描く史実に沿った映像は、あなた自身の目でしっかりと。

ちなみに旧約聖書にいうダビデは、ミケランジェロのダビデ像で有名な、羊飼いかから後にイスラエルの王となったダビデのこと。またゴリアテは、旧約聖書の「第一サムエル記」第17章に登場するペリシテ人の巨人兵士のことだ。剣と槍を武器として戦う巨人兵士ゴリアテに対して、羊飼いのダビデは5個の石を持って応対。突進してくるゴリアテに対してダビデが投げた石は見事に命中し、あっけなくゴリアテは倒れ、ダビデはゴリアテの剣を奪ってゴリアテの首をはねてしまったから、これにて万々歳というわけだ。この旧約聖書のお話は「弱小さな者が強大な者を打ち負かす喩え」としてよく使われるが、農民出身のポルトガル軍のフランシスコ軍曹の方が、こんなお話も知らない今ドキの日本人より、よほど知識人かも・・・。